

荻野家所蔵『伝平尾鉦（下田歌子）自筆 万葉集歌かるた』に関する考察（Ⅰ）

―かるた札の翻刻及びかるたから見える下田の幼少期について―

愛甲 晴美 若森 慶隆

はじめに

本稿は、下田歌子（安政元〔嘉永七〕（一八五四）年〜昭和十一（一九三六）年）（以下、下田）の生誕地である岐阜県恵那市岩村町における、荻野家所蔵『伝平尾鉦（下田歌子）自筆万葉集歌かるた』（以下、万葉集歌かるた）^キに関する考察の初回として、かるた札の翻刻と、かるた札から見える下田の幼少期についての一考察を加えるものである。

万葉集歌かるたを所蔵する荻野家は、現在このかるたを管理されている荻野あき氏の祖父である荻野萬助の代まで、岩村町（字）殿町の商家であった。荻野萬助（明治十七（一八八四）年〜昭和三十八（一九六三）年）は「美濃屋（みのや）」の屋号で文具店（貸本・雑品の扱いを含む）を営んでいた。萬助は、岩村町（字）本町を中心

とした地域で主に商売に携わる若い世代の、地元で有力な当主の集まりであった「千歳倶楽部」（明治四十二年創設）の一員でもあった。^{注2}

このかるたは木製箱入で箱裏に、「明治弐年己巳春 平尾おせきさま書之 明治十五年八月九日足立善吉殿ヨリ荻野権七求之」の箱書を有する。荻野家でも下田歌子自筆のものとして受け継がれてきた。平尾おせきは下田の旧名平尾鉦である。従って箱書によれば、下田が明治二年満十四歳の時に書いたものということになる。箱書にある荻野権七（弘化三（一八四六）年^キ〜大正九（一九二〇）年）は萬助の父である。

かるたは万葉集歌が書かれた読み札七六枚・取り札七九枚あわせて一五五枚、それ以外に、伊勢物語所収歌の読み札一枚、内容が不明な読み札二枚・取り札八枚 あわせて一〇枚の三種類合計一六六枚が混在して箱に入っている。札の寸法や、札に使用さ

れている紙も三種で異なる。収納されている箱の形状や大きさから、正確にはわからないが、もとは百組ほどの万葉集の歌かるたに、何らかの理由で紛失もしくは別のかるたが混ざってしまった結果と思われる。

これまで確認されている平尾鉞自筆のものは、和歌短冊、歌合詠草、詩稿などが知られるが、自筆のかるたの存在は知られていない。しかしながら、かるたについて下田は昔の回想のなかで次のように記している。

私の藩などでは、非常にかかるたが流行致しました。そして私ども親戚親友の間柄の家々では、疎末なるかるたを大抵三四通りは手製で作つて用意して置きまして、順々に古歌や古詩を適宜に撰つて、上下に記して置いて、一春採ると又次の年は別のを撰書して採りました。斯うして、知らずぐの間、古い有名な詩歌を、子どもや若い者が暗誦する事に便したのであります。

岩村藩において、かるたが流行し、手製の歌かるたを作成し、遊びながら、古い有名な詩歌を覚えていたという記述は、下田も含め藩内の人々の間で行われた遊戯の一端を伝えるのみならず、かるたが古歌を暗誦し、覚えることを目的とした教養的な遊戯であったことを示している。

今回明らかとなった万葉集歌かるたの存在は、回想の記述を裏

付けけるものと推測され、下田の知識や教養を育んだ幼少期や、歌人としての下田を考える上でも貴重な資料といえよう。

なお、万葉集歌かるたには下田本人による署名などはなく下田自筆を裏付ける情報は現時点では箱書のみであることから、伝とした。下田自筆であるかの検証は今後さらに調査を進め明らかにしていきたいが、箱書にある荻野権七及び足立善吉と推定される人物(後述)ともに平尾家が上京する以前から岩村に居住していることから、平尾家とも何らかの関わりがあつた可能性も否定できない。また、下田以外の人物の手によるものという積極的な根拠は見いだせないため、本稿では、万葉集歌が用いられた歌かるたについては、下田自筆を前提として考察を進める。

本稿の執筆及び翻刻は愛甲が担当し、現地調査・資料撮影は若森と愛甲が共同で行った。

1 万葉集歌かるたについて

以下に万葉集歌かるたに関する調査報告を示す。

木製蓋付箱 箱紐付

箱寸法

縦八・五cm 横一二・三cm 高一〇・八cm

内部に取り外し可能な仕切り板あり

箱裏

墨書

明治貳年己巳春

平尾おせき さま 書之^注

明治十五年八月九日足立善吉殿ヨリ

荻野権七求之

右下部に白地に赤い装飾のあるシール様の貼付紙 朱文印「荻野」、
印の上部に87下部に76+3^注

かるた札

形状により①から③に分けられる。

①札表 紙本、薄茶色銀箔散らし

札裏 紙本、茶色 縁（へり）返し

縦六・六cm 横四・八cm

読み札 七六枚 上の句 墨書 下の句 朱書

取り札 七九枚 下の句 墨書

所収歌 万葉集

②札表 紙本、薄茶色、上部に朱色の山様の文様あり朱筆で書いたものか不明

札裏 紙本、くすんだ青色 黒色の四角印の縁のような跡、朱色の縁あり 縁返し

縦六・四cm 横四・三cm

読み札 一枚 上の句、下の句とも墨書
所収歌 伊勢物語

③札表 紙本、薄茶色無地^カ

札裏 紙本、茶色 縁返し

縦六・三cm 横四・五cm

読み札 一枚 上の句、下の句とも墨書

取り札 九枚 下の句 墨書

所収歌 不明

①②③いずれも使用したことによる擦れや破損が見られる。①の裏紙はカビの跡などが多く見られる。③の札は使用頻度が高かったためか、劣化が激しく、表面が磨滅した部分が多く、墨書も判読不能な部分が多い。また、縁部分の破れも見られる。



図1 かるた箱

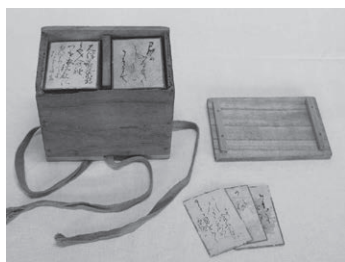


図2 かるた箱内部

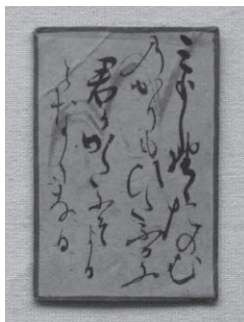


図7 ②読み札 札表

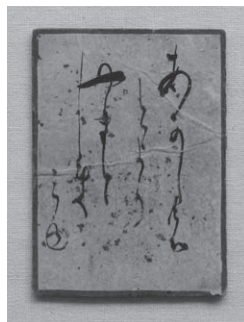


図6 ①取り札 札表

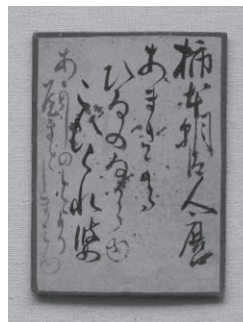


図4 ①読み札 札表



図3 箱裏

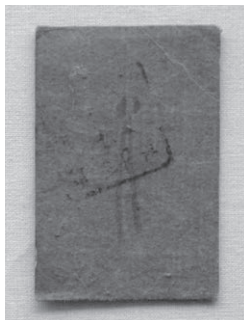


図8 ②読み札 札裏



図5 ①読み札 札裏

荻野あき氏によれば、権七の職業について詳細は不明とのことであつたが、同氏より「魚青物陶器荒物白木鋳物賣捌 美濃國恵那郡岩村④荻野権七」の押印を有する文書の存在をお教えいただいた。この印は、「恵那郡岩村二十番地 荻野権七」の墨書の下に押されている。これにより、④(商標^カ)で生鮮食品、生活雑貨などを扱う商いをしていたことがうかがわれる。^注

万葉集歌かるたは、箱書から権七が明治十五(一八八二)年に足立善吉という人物から入手したことがわかる。この人物については、旧岩村藩内で足立善吉という姓名、且つ明治十五年に存命の人物として判明したのが、岩村町内在住の足立修一氏の曾祖父にあたる方のみであつたことから、その人であろうと思われる。

荻野家と足立家は距離的にも近い場所にあり、修一氏の代でも過去に交流はあつたという。足立家は修一氏の祖父禎蔵(元治元(一八六四)年〜昭和元(大正十五)(一九二六)年)は「三河屋」の屋号で表具屋を営んでいた。その父である善吉(天保十二(一八四一)年〜明治二十八(一八九五)年)の職業については、豆腐などを

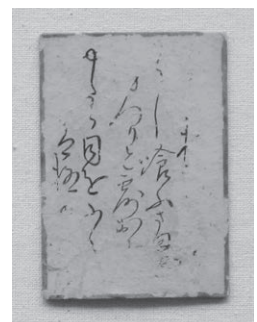


図9 ③読み札 札表



図10 ③読み札 札裏

扱っていた可能性があるとのことだが、詳細は不明である。かるたを譲ったとされる年には四十一歳ということになる。

足立家はこのほかにも下田の書幅を所蔵されているが、その由来は伝えられていない。万葉集歌かるたに関しても関係する情報は残されておらず、下田や平尾家との関係を示す資料も現時点では確認できないため断定はできないが、万葉集歌かるたの前の持ち主であった可能性は高いと思われる。

2 万葉集歌かるたの翻刻

凡例

一、かるた札は全体像を把握しやすくするために一覧表形式で表示した。

一、札の配列は前項①～③の分類順とし、所収を、万葉集は「万」、伊勢物語は「伊」、③の所収は不明のため空欄とし、①については万葉集の巻、『国歌大観』の歌番号順に配し、②は伊勢物語に所収されている段、③は読み札、取り札の順で取り札は筆者の撮影順とし、算用数字で通し番号を付した。

一、読み札と取り札が揃っているものは、それぞれの欄に翻刻した。いずれかの札が欠けている場合は欠けている札の欄を空欄とした。

一、補足が必要な場合は備考欄に記載した。

一、備考欄に、①の取り札のみのもの、あるいは読み札で歌が判読できないものには、補足的に歌の訓み下し文を付した。訓み下し文は岩波文庫『万葉集』（全5冊）岩波書店（二〇一九）を用いた。

一、本文の翻刻にあたって、万葉集の諸本との語句の校異は行わず、原文のみとした。従って、補足の訓み下し文は原文と異なる場合があるが、今回は理解の補助とすることを目的に用いるため、この点について取り上げることはしない。

一、本文中の旧字は可能な限り原文通りとした。但し表記が難し

い場合は常用漢字を使用した。

- 一、カタカナ記載はそのままとし、変体仮名はひらがなに直した。
 一、破損などのため判読不明な箇所は□で示した。字数が分かる場合は字数分を□で示した。判読が不確実な文字は□で囲った。

12	11	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01	集	巻・段	歌番号	読み札	取り札	備考
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万						
3	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1						
235	142	108	107	75	64	59	57	42	41	33	27						
すめろきは神にしませハあま雲の いかつちのへに廬せるかも	柿本人麿 家にあれはけにもるいひを草まくら たひにしあれはしひのハにもる	有間皇子 山をまつと君かぬれけんあし曳の 山のしづくにならまし物を	石川郎女 あをまつと君かぬれけんあし曳の 山のしづくにならまし物を	大津皇子 足ひきの山のしづくにいもまつて わか立ぬれぬ山の雫に	うちま山朝風さむしたひにして ころもかすへきいもゝあらなくに	大行天皇 さむきゆふへはやまとし思ほゆ	志貴皇子 あしへゆくかものはかひに霜ふりて さむきゆふへはやまとし思ほゆ	譽謝女王 なからふるつまふくかせの寒き夜に わかせの君ハひとりかぬらん	持統天皇 ひくまのに匂ふ萩原いりミたり ころもにほハせたひのしるしに	いものるらんかあらししまわを	人麿 しほさみにいらこのしまへこく舟に いものるらんかあらししまわを	大宮人の玉もかるらん くしろつく□ふしの□□に今もかも	柿本朝臣人麿 あれたるミやこ見れハかなしも	高市古人或黒人 さ、波の国つミかミのうらさひて あれたる都ミれハかなしも	天武天皇 よき人のよしとよくミてよしといひし よし野よくミよき人よきミ	よし野よくミよき人よきミ	下の句「大宮人」の「大」「人」及び「ん」の文字 右半分に墨書で上書きか

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万
4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
500	465	413	396	351	328	320	318	303	297	278	272	271	266	264
<p>基檀越妻 神風のいせのはま荻折ふせて たひ寝やすらんあきはまへに</p>	<p>大綱公人主 すまのあまのしほやき衣ふちころも まどふにしあれはいまたきなれす</p>	<p>笠郎女 みちのくのまの、かや原とほけれと おもかけにしてミゆとふ物を</p>	<p>沙弥満誓 世の中を何にたとへん朝ひらき こきいにし舟のあとなきかこと</p>	<p>大宰少貳小野老 あをによしならの都はさく花の 匂ふかことく今さかり也</p>	<p>ふしのねにふりおける雪ハミな月の もちにけぬれは其夜ふりけり</p>	<p>よみ人しらす ふしの高根に雪はふりけり</p>	<p>山部赤人 田子のうらゆ打出てミレはましろにそ</p>	<p>柿本人麿 なくハしきいなミの海の沖津なミ ちえにかくれぬやまとしまねは</p>	<p>田口益人 ひるミレとあかぬたこのうら大君の ミことかしこミよるミつるかも</p>	<p>高市連黒人 さくらたへたつなきわたるあゆちかた しほひにけらしたつなきわたる</p>	<p>高市連黒人 しまこきかくるたなゝし小船</p>	<p>高市連黒人 しまこきかくるたなゝし小船</p>	<p>柿本人麿 あふミのミタなミちとりなかなけは 心もしぬにむかし思ほゆ</p>	<p>柿本人丸 ものゝふのやそうち川のあしろ木に いさよふ浪のゆくゑしらすも</p>
<p>たひねやすらんあきはまへに</p>	<p>秋風さむミしのひつるかも</p>	<p>まどいにあれはいまたきなれす</p>	<p>おもかけにしてミゆとふものを</p>	<p>こきにし舟のあとなきかこと</p>	<p>にはふかことく今さかりなり</p>	<p>もちにけぬれ□其夜ふりけ□</p>		<p>千重にかくれぬやまとしまねハ</p>		<p>くしけのをくしとるも見なくに</p>	<p>しまこきかくるたなゝしをふね</p>	<p>しほ干にけらしたつ鳴わたる</p>	<p>心もしぬにむかしおもほゆ</p>	<p>いさよふなみのゆくゑしらすも</p>
	<p>移朔して後に、秋風を悲嘆して家持の作りし 歌一首 うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み 偲びつるかも</p>									<p>石川少郎の歌一首 志賀の海人は海布刈り塩焼き暇なみくしらの 小櫛取りも見なくに</p>				

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	集
7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	巻・段
1231	1140	1096	1092	1056	1045	1044	1011	968	957	925	880	871	860	854	歌番号
あまきらひひかた吹らしみつきの岡のミなどになミたちわたる	よミ人しらす しなかつりあなのをくれはありま山 夕きりたちぬ宿はなくして	久しくなりぬあめのかく山 久しくなりぬあめのかく山 久しくなりぬあめのかく山	ひはらの山をけふミつるかも ひはらの山をけふミつるかな	よミ人しらす □□とめらかうミをかくとふかせの山 □のゆければミやこと成ぬ なる神の音のミきゝしまきむくの		ならの都に年のへぬへき ならの都に年のへぬへき ならの都に年のへぬへき	こてふににたりちりぬともよし こてふににたりちりぬともよし こてふににたりちりぬともよし	ミつきのうへになみたのこはん ミつきのうへになみたのこはん ミつきのうへになみたのこはん		きよきかはらにちとりしハなく きよきかはらにちとりしハなく きよきかはらにちとりしハなく	みやこの手ふりわすらえにけり みやこの手ふりわすらえにけり みやこの手ふりわすらえにけり	ひれふりしよりおへる山の名 ひれふりしよりおへる山の名 ひれふりしよりおへる山の名	我はよとますきみをしまたむ 我はよとますきみをしまたむ 我はよとますきみをしまたむ		読み札
															取り札
															備考

57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万
10	10	9	9	9	8	8	8	8	8	8	7	7	7	7
1818	1812	1777	1714	1701	1598	1558	1446	1435	1426	1424	1381	1354	1339	1265
読人不知 かた山きしにかすミ棚引 こらか名にかけのよろしきあさつまの	柿本朝臣人麿 かすミたな引はるたつらしも 久かたの天のかく山此ゆうべ		読人しらす よとめるよとに月のかけミン おちたきちなかるゝ水の岩にふり	読人不知 さよ中と夜は更 きこゆるそらに月わたるミゆ	大伴宿禰家持 さほしかの朝たつ野への秋はきに 玉とミるまておけるしら露	おもふ人とちあひミつるかも 秋 おもふ人とちあひミつるかも	大伴家持 春の野にあさるきゝすのつまごひに おのかあたり□人にしれ	厚見王 かハつなくかミなミ川にかけミえて 今やさくらん山ふきの花	山部赤人 わかせこにミせんと思ひし梅のはな それともミえず雪のふれゝは	山部宿禰赤人 春の野にすミれつミにとこし我そ のをなつかしミ一夜寝にける		よみ人しらす 白すけのまゝ秋原心ゆも 思ハぬ君かころもにすりぬ	よみ人しらす つき草に衣いろとりすらめとも うつろふ色といふかくるしき	かたのまよひはたれかとりみん
かた山きしにかすミ棚ひく	かすミたな引春たつらしも	つけのをくしもとらんともハシ	よとめるよとに月のかけミゆ	きこゆるそらに月わたるミゆ		おもふ人とちあひミつるかも	おのかあたりを人にしれつゝ		それともミえず雪のふれゝは	のをなつかしミ一夜ねにける	こゝろふかめてわかもえるらん	おもハぬきミかころもにすりぬ	うつろふいろといふかくるしき	かたのまよひはたれかとりみん
	(石川大夫の遷任して京に上りし時に、播磨 娘子の贈りし歌二首) 君なくはなぞ身装はむくしげなる黄楊の小櫛 も取らむと思はず			弓削皇子に献りし歌三首 さ夜中と夜はふけぬらし雁が音の 聞こゆる空を月渡る見ゆ	(沙弥尼等) 鵲鳴く古りにし郷の秋萩を 思ふ人どち相見つるかも	下句「人に」「れ」の文字に薄く墨書上書き か					(河に寄せき) 広瀬川袖漬くばかり浅きをや心深めて我が思 へるらむ			今年行く新防人が麻衣肩のまゆひは誰か取見 む

72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	集
15	12	12	11	11	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	巻・段
3608	3097	3048	2802	2655	2220	2147	2096	2055	1993	1981	1978	1883	1843	1840	歌番号
あまかさかるひなのなからゆこひくれれば あかしのとよりやまとしまみゆ	よみ人しらす こまに水かへわれよそにミン 柿本朝臣人麿	よみ人しらす なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読人不知 なれはまさらて恋こそまされ	読み札
あかしのとよりやまとしまみゆ	こまに水かへわれよそにミむ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	なれはまさらすこひこそまされ	取り札
															備考

87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万
20	20	20	20	19	19	18	18	17	17	17	16	16	15	15
4458	4380	4317	4315	4249	4200	4097	4075	3947	3921	3908	3836	3807	3666	3610
散位馬史 君にかたらの おきなる川は たえぬとも 事つきめやも	大田部三成 なにハとをこ き出でミれハ 神さふる いこま高根に 雲そたな引	秋の野ハ今こ そゆかめものゝ ふのをとこ女 のはなにほひ 見に	大伴家持 ミヤ人の袖つ き衣秋萩に 匂ひよろしき たかまどの宮	大伴家持 いはせのに秋 萩しぬきうま なめて初とかり たにせてやわ かれん	田子のうらの そこさへ匂ふ ふちなミをか さしてゆかん ミぬ人のため	内蔵忌寸繩磨 みちのく山に こかね花さく	聖武天皇 すめらぎの御 代さかえんと あつまなる みちのく山に こかね花さく	大伴宿禰家持 けきの朝け秋 かせきむしと をつ人かりか きなかん時ち かみかも	大伴宿禰家持 ききつハたき ぬにすり付ま すらをのきそ ひかりする月 はきにけり	境部老鷹 たてなめてい つミの川のミ をたえすつか えまつらむ大 ミやとところ	采女 あさか山かけ さへミゆる山 の井のあさき こゝろをわか もハなくに	よミ人しらす タされは□風 さむしわきも こかときあら ひ衣ゆきては や□む	柿本人麿 あこのうらに 船のりすらん をとめらかあ かもすそにし ほミつらんか	
君にかたらん ことつきめやも	いとまたかね にくもそたな ひく	をとこをミな のはな匂ひミ に	にほひよろし きたかまどの 宮	はつとかりた にせてやわか れん	かさしてゆかん ミぬ人のため	みちのく山に こかねはなさ く	なけきわたる か人のとふま て	かりかきなか むとき近ミか も	きそひかりす る月は来にけ り	つかえまへら むおふミやと ころ	とにもかくに もねちけ人の とも	あさき心をわ かもハなくに	ときあらひ衣 ゆきてハやき ん	あかもすそに しほミつらん か
							一 所心の歌 相思はずある らむ君をあや しくも嘆き渡 るか人の問ふ まで				倭人を誇りし 歌一首 奈良山の児手 柏の両面にか にもかくにも 倭人が伴 右の歌一首は、 博士消奈行文 大夫作りき。			

[illegible]

3 かるた札から見える下田の幼少期

今回の調査資料でまず注目したいのは、歌かるたに万葉集が使われているということである。下田の回想から、自家製のかるたは様々作られたようだが、その中に、万葉集があつたということがこのかるたの存在で明らかになった。

下田は『詠歌之栞』の「歌の沿革」の項で、万葉集までの上古の歌を「歌の心、詞、純朴にして強く気高く、毫も偽り飾りのあと無かりき」と評している。^{注6}そして、万葉集については、次のように記している。

撰集、すなわち、幾多名人の詠めりし、各種の歌を撰びて、一部の歌集となしたるは、万葉集を以て、嚆矢とす。（中略）まことに、当時の歌を知らんと欲せば、万葉集に若くもの無し。集中の歌は、気骨あり。風韻あり。豪強にして高雅、流麗にして、莊重なり。到底、後人の、能く踵ぎて及ぶこと能はずと、古調流派の人の云ふ所も、亦、強ち誣いたることにあらずるべし。これ、単へに、偽り飾らず、作らず、求めずして、自然の趣きを得たる故にこうあるらめ。^{注7}

万葉集は日本の和歌集の始まりであり、上古の歌は、純朴で強く気高く、偽り飾ることがないとする。当時の歌を知るには、万葉集が必須であるとしている。この万葉集を幼少期に学んだ方法

の一つが歌かるたであつたと推測される。

歌かるたの成立以降、「古今和歌集」「三十六歌仙歌集」「自讃歌集」「千載和歌集」「源氏物語歌集」「伊勢物語歌集」などさまざまな和歌集が使われたが、徐々に「百人一首」の活用例が多くなつたという。^{注8}では「万葉集」はどうであつただろうか。江橋崇氏によれば、「万葉集」の歌かるたは江戸時代には存在せず、明治以降何回か制作、販売されたが、消えていった。^{注9}自家製ではない製品としての歌かるたでは、「万葉集」は他の和歌集ほど使われていなかったということであろう。自家製だからこそ、そのような流れに関係なく下田の万葉集歌かるたは作られ、使われたと考えられる。さらに伊勢物語など別種の歌かるた札が混在していることから、より自由に様々な歌集などからかるたが作られていたことも想像される。

次に、万葉集歌かるたの札から、どのような遊び方、学び方をしていたかを考えてみたい。

江橋氏は、安土桃山時代に海外からカルタが伝来して以降、江戸時代初期に考案された日本式の「物合わせ」のかるたは、「総合せかるた」と、和歌や漢詩、俳諧などの文言を二枚に分ち書きした小紙片を複数用意して、多くのカードの中から対応する二枚を合せて一組を完成させる「歌合せかるた」に分かたれるとする。^{注12}

また、吉海直人氏のはかるた遊びを描いた絵から、「初期の歌賀留多は、詠みあげて取るのではなく」、「場に積まれた上の句札を一枚めぐり、ばらまかれた地札からそれに合う下の句を探すもの

だつたようだ」とし、また、読み上げる詠み手の登場は元禄期（一六八八〜一七〇四）以降と思われるとしている。当初読み札には上の句、取り札には下の句のみが書かれており、読み手も取り手も和歌を暗誦していなければ楽しく遊べない状況だったために、便宜的に一〇〇首すべてが記された冊子が付録としてつけられ、それを使って下の句まで詠み上げていたであろうことを描かれた絵から推測している。冊子を用いず、読み札に歌一首を書く形式は幕末頃に考案されたという。そしてこれは『百人一首』^{注13} かるただけの独自のものであるとする。

万葉集歌かるたの読み札を見ると、上の句下の句を書いていることは確かであるが、その書き方には特徴が認められる。読み札である前掲図4の実物では、下の句は朱筆で書かれ、かるた札に上の句が書かれた範囲に比べて端に寄せて狭い範囲に書かれている。これは読み札全般に共通する傾向である。最初から歌一首を詠み上げる前提で書くなら、図7で示した②の読み札のように、全体のバランスを考えて書く方が自然であるし、下の句を朱筆で書く必要もないであろう。

読み札に朱筆で下の句を書き入れている例として、国文学研究資料館のホームページ上に掲載されている「自讃歌かるた」が挙げられる。これは特に書き込みの跡が著しいものとして、紹介されている。実際に画像を見ると、絵入の上の句札には、もともと書かれている上の句だけでなく、朱筆で下の句が書き込まれている。解説の中西智子氏は、持ち主の記憶の曖昧さのために遊びに支障が出たのか、「上句の絵の隙間に、朱の筆で決然と下句を書き込

んでしまっている」と指摘している。^{注14} 遊びを通して歌を覚える上で下の句を書き込む必要があったということは、下田の万葉集歌の札にも通じるものがある。

前出の下田の回想文には、自家製のかるたを作るときに、古い詩歌を選んで「上下（うえした）と記して置いて」とあるが、これは上の句を書いた札と、下の句を書いた札を用意したということであろうか。下田は『女子遊嬉の栞』の「歌がるた、詩がるた」の項で、百人一首あるいは古今集から歌を選んでかるたに書く自家製かるたの方法を挙げており、そこでも上の句と下の句を分けて書くところがある。取り札が下の句であることに変わりはないが、読み方は歌全体を読む方法と上の句のみを読む方法、下の句だけを読む方法があるとして、歌を覚えるためならば、全体を読むのが良いと書いている。^{注15} 推測の域を出ないが、下田の万葉集の歌かるたも、当初は上の句、下の句で作ったが、歌を覚えるために一首を読み上げる方法で遊ぶために、前出の自讃歌かるたのように、上の句を書いていたものに、後から朱筆で下の句を補ったということも考えられる。

詩がるたについては、少年男児の遊びだが、維新前後には、女児も漢文字を学ぶものが出てきたので、唐詩選や聯珠詩格で歌がるた同様に作り、遊ぶことがあったと書いている。^{注16} 前出の回想から、下田が盛んにかるた遊びをしたのは八、九歳から十三歳くらいまでという。その頃、かるたを通して学んだのが和歌だけでなく、漢詩にも及んでいたことは、親戚の家で出来た古詩のかるたでの勝負のために、徹夜で二百首ほどの古詩を暗誦したエピソード

ドから読み取れる。詩^{注17}がるたを女兒も遊んだという記述は、下田本人の体験を基にしたものといえる。

また、尊王派のごく内輪の人たちの間で「有志がるた」と名付けて「国事に奔走した志士達の詩歌をかるたに記して」取ったともあり、そのような仲間うちでは、「百人一首のかるたなどは古いと言って面白がらなかった」という。^{注18}このことは、『下田歌子先生傳』でも取り上げており、三歳、四歳から正月の年中行事としてかるた遊びを通して「幼い詩心を揺り動かし」、五歳には和歌を詠^{注19}むほどになったとしている。この一節には誇張が感じられるが、藩内で自家製かるたが流行ったということは確かであろう。

小泉吉永氏によれば、江戸時代の特に後半には、おもに寺子屋で使用された「往来物」と呼ばれる初歩的な教科書の中でも、特に女兒の初歩的かつ基本的な教養として「往来型百人一首」が広く用いられた。また、十歳以上の男女が正月遊びでかるた遊びとしての「百人一首カルタ」をしていたことなどを紹介した『^{江戸絵本}風俗往来』を挙げて、読み書きを習う子どもたちは十歳頃には、「百人一首」を一通り覚えてしまうのが普通だったのであろうとしている。^{注20}

岩村藩内の寺子屋については、『岐阜県教育史』の寺子屋一覧表に記載があるが、^{注21}教授内容までは明らかでない。しかし、岐阜県内の寺子屋の一般的な教授内容として「百人一首」もあげられており、岩村藩内の寺子屋でも使用されていた可能性は十分考えられる。

百人一首は庶民にとっても身近な教養であったと考えられる。

かるた遊びも、庶民を含めて一般的なものであったと思われる。ならば尚のこと、士族であった平尾家周辺の人びとの間では、百人一首では飽き足らず、様々な詩歌かるたを作るというのも理解できる。

これまで、下田の上京以前の幼少期に身につけた知識や教養の豊かさは、天性の才に加え父録藏などからの教えや、読書を中心とした勉強によるものと語られてきた。しかし、今回の調査から岩村藩内の教養レベルの高さが生み出す環境から、歌かるたや詩かるたといった遊戯を通して、下田の和歌や漢詩などの知識が育まれたことが改めて確認できた。新たにその存在が明らかとなった万葉集の歌かるたはそのなかでも、和歌集の嚆矢であり、古歌の知識を得るために必須の万葉集を用いて作られているという点で特筆すべきであろう。

おわりに

今回調査を行った資料は、下田の幼少期に和歌や漢詩の教養を身につけた一つの手段を明らかにする手掛かりとなった。万葉集歌かるたは、負けず嫌いで記憶力に優れた少女時代の平尾銘を彷彿させる。かるた遊びは一人ではできない。そのことから、幼少期の下田を取り巻く岩村藩内の人々も同様に遊びを通して教養を身につけていたことがわかる。

そして、装飾品ではない遊び道具として使われて傷みも激しいこのかるたが、下田直筆のものとして岩村の方々によって今日

まで大切に受け継がれたことに深い感慨を覚える。箱書から、持ち主がこのかるたを入手したのは、下田が下田学校（のちに桃天学校と改称）を開校した明治十五年である。下田は上京して宮中に仕出し、歌の才を認められて歌子の名を賜った。そして、宮中を辞して、女子教育者という新たな道へと進む。おそらく故郷にはそのことが伝えられていたのであろう。下田の幼少期に教養を培ったかるたが、奇しくもこの時期に受け渡されていたことに驚かされる。

本稿では取り上げられなかったが、下田の万葉集歌かるたは、数千首もある万葉集歌から何らかの意図をもって選んだ歌で作られたものと考えられる。その選定に関する考察も今後行っていくべきことと考える。

さらに、かるたに用いられた万葉集歌の語句から、典拠となる万葉集諸本、あるいは注釈書などどのような本であったかの解明も重要と思われる。これは、下田が幼少期をすごした幕末から明治初め頃の岩村藩において、万葉集を学ぶための書物として存在したと推測され、下田のみならず下田の周辺で学ばれていたと想像される。岩村歴史資料館では藩校知新館関連の和漢古書を収蔵しているが、下田が上京する以前の出版で、万葉集に関する書籍は旧丹羽瀬家蔵本中の『萬葉集略解』のみである。岩村では所蔵が確認されていない他の諸本も併せて検証する必要がある。

また、今回は万葉集歌を用いた札を中心に考察したが、その他の札に関しても、下田自筆の可能性を含め、今後の調査課題としたい。

謝辞

本稿の翻字作業にあたっては、元中学校国語科教諭井上充氏、実践女子学園旧職員大塚宏昌氏のご指導ご協力を賜りました。また、本調査にあたっては、左記の関係諸氏ならびに機関より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

（順不同）

足立修一氏、荻野あき氏、内野るみ子氏、内山容子氏、実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所客員研究員・実践女子学園岩村親善大使鈴木隆一氏、チャー志帆氏、岐阜県立恵那南高等学校教諭樋田友直氏、藤井志朗氏、藤井雅子氏、松井みさ子氏、恵那市教育委員会三宅唯美氏・塚本恵伍氏、渡曾延彦氏、渡曾直子氏、岩村コミュニティセンター、岩村歴史資料館

1 注

荻野家所蔵の歌かるたには、万葉集歌を用いた札以外に、伊勢物語及び所収歌が不明なかるた札が混在しているが、これらも含めた略称とする。

2

愛甲「千歳倶楽部と下田歌子の関わりに関する一考察―岐阜県恵那市岩村町における新出資料の下田歌子書幅と千歳倶楽部に関する調査―」『実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所年報』第九号 二〇二三

3

本文および注において、調査で確定できなかったが内容的に推定されるについては小字「カ」を付け加えた。

4

「つれづれの記（二月の巻）」『愛国婦人』第五百八十五号（昭和六年一

- 月一日)
なお、引用文のふりがな、傍点は省略し、旧字は常用漢字に改めた。
殿カ
- 5 数字の87、76+3は、87が取り札、76+3が読み札を記したものと
思われる。
- 6 権七の息子の萬助の代にも④は使用されている。
- 7 下田歌子『詠歌之栞 家庭文庫第三編』一九頁
- 8 同8 八三〜八四頁
- 9 江橋崇『ものと人間の文化史173・かるた』一四四頁
- 10 同10 三〇五頁
- 11 同10 一二一〜一二三頁
- 12 吉海直人『百人一首の世界―その文化的広がり』『百人一首万華鏡』
一二〜一三頁
- 13 「国文研千年の旅 自讃歌かるた」<https://www.nijl.ac.jp/koten/kokubun1000/1000nakanishit1.html> 二〇二四年十月十五日閲覧
- 14 下田歌子『女子遊嬉の栞 家庭文庫第十一編』九七〜九八頁
- 15 同15 一〇〇頁
- 16 同4
- 17 同4
- 18 『下田歌子先生傳』五七〜五八頁
- 19 小泉吉永「女子用往来と百人一首」『百人一首万華鏡』参照。小泉氏
によれば、読書の手本としてだけでなく、女兒の手習いの初歩的な
標準テキストとして百人一首が用いられていたという。
- 20 『岐阜県教育史 史料編 近世』六六二〜六九五頁
- 21 『岐阜県教育史 通史編 古代・中世・近世』三八四頁
- 22 橋千蔭『萬葉集略解』江戸後期重印本
- 23

参考文献・引用

- ・ 橋千蔭『萬葉集略解』尾張名古屋 東壁堂永樂屋東四郎 江戸後期
重印本 岩村歴史資料館蔵
 - ・ 下田歌子『詠歌之栞 家庭文庫第三編』博文館 一八九八
 - ・ 下田歌子『女子遊嬉の栞 家庭文庫第十一編』博文館 一九〇〇
 - ・ 橋千蔭著 與謝野寛他編『萬葉集略解 日本古典全集 日本古典全
集刊行會 一九二五
 - ・ 故下田校長先生傳記編纂所編『下田歌子先生傳』一九四三
 - ・ 山口吉郎兵衛『うんすんかるた』リーチ 一九六一
 - ・ 乙竹岩造『日本庶民教育史』（復刻版）臨川書店 一九七〇
 - ・ 高橋幹夫『江戸の暮らし図鑑―道具で見る江戸時代』芙蓉書房 一九九四
 - ・ 板垣弘子編『下田歌子著作集 資料篇（三）』実践女子学園 一九九九
 - ・ 『岐阜県教育史 通史編 古代・中世・近世』岐阜県教育委員会
二〇〇三
 - ・ 『岐阜県教育史 史料編 近世』岐阜県教育委員会 二〇〇三
 - ・ 白幡洋三郎編『百人一首万華鏡』思文閣出版 二〇〇五
 - ・ 岩井直子・高橋良政編『岩村歴史資料館蔵和漢古書目録』恵那市教
育委員会 二〇〇九
 - ・ 江橋崇『ものと人間の文化史173・かるた』法政大学出版局 二〇一五
 - ・ 岩波文庫『万葉集』（全五巻）岩波書店 二〇一九・二〇二二
 - ・ 江橋崇『ものと人間の文化史189・百人一首』法政大学出版局 二〇二二
- あいこつ・はるみ／下田歌子記念女性総合研究所 客員研究員
わかもり・よしとか／下田歌子記念女性総合研究所 客員研究員

A Study of Ogino Family Collection

“Presumed Hirao Seki (Shimoda Utako)’s handwritten karuta cards” (1)

—Reprinting karuta cards and discussing Shimoda’s childhood as seen through karuta—

AIKO Harumi

WAKAMORI Yoshitaka

Karuta cards written in 1869 by Hirao Seki (Shimoda Utako’s name before her marriage) were discovered in Iwamura, Ena City, Gifu Prefecture.

The karuta cards were placed in a wooden box containing three different types of karuta. Most were made from poetry selected from the Manyoshu, while the others were made from poetry in Ise Monogatari and poetry of unknown origin.

This article reprints these karuta cards and discusses Shimoda’s childhood through the karuta.

Shimoda wrote that karuta was very popular in Iwamura during her childhood. She also wrote that she selected famous waka and kanshi and made several types of homemade waka and kanshi karuta to play with. She also wrote that playing karuta helped her learn waka and kanshi. This study assumes that she learnt poetry using these karuta cards, confirming her reminiscence.

The karuta cards found have the first and second verses of poetry written on them: the first verse is written in black ink, and the second verse is written at the edge of the cards in vermilion ink. This is intentional, and it can be inferred how Shimoda and her friends played karuta: the player takes the cards of the second verse after listening to the first verse read by the reader, which requires combinations of the first and the second verses to be memorized.

Shimoda’s rich knowledge and culture were acquired from her father’s teachings, and reading and playing karuta. This was nurtured in Iwamura, which had a high standard of education.